

科目名	18. 生活行動からみるからだⅡ 情報を得てからだ動くしくみ				
履修年次	1年次	科目区分	専門基礎分野	単位数 (時間)	1単位 (30時間)
ディプロマポリシー(DP)	<input checked="" type="checkbox"/> 人を大切にするところ <input type="checkbox"/> 現象を適切に把握し地域で生活する人を支える看護実践力 <input type="checkbox"/> チームの中で連携・協働するための力 <input type="checkbox"/> 専門職業人として自己研鑽する力				
科目目標	人体の恒常性維持のための調節機構（情報受容、処理、伝達）と動くの基本的なしくみを理解することができる				
到達目標	自分のからだに関心を持ちながら、生活を営むために必要な情報の受けとり、処理と伝達、からだ動くしくみを表現することができる				
評価方法	筆記試験（100点）				
使用テキスト	系統看護学講座 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① 医学書院 看護形態機能学 生活行動からみるからだ 日本看護協会出版会				
参考文献					
教育方法と学生への期待 (求めること)	看護の対象である人間のからだはどのようなつくり（形や働き）になっているのかは看護学にとって最も基本的な知識の一つである。からだの知識は、病気の理解、病気等による生活行動への影響の理解、看護援助につながっていくので、しっかり身につけていって欲しい。ここでは外部環境からの刺激をとらえて適切な反応をして身の安全を守るという外部環境とのやりとりと、刻々と変化する内部環境の状態をとらえて、その変化に反応して恒常性を維持する調節機構の基本的な仕組みを理解する。その1として外部環境とのやりとりの最初の段階である情報を受けとる受容器(見る、聞く、におう、触れる(皮膚))、外部環境からの刺激を認識し判断し記憶する中枢神経(脳)、直接情報を伝える(末梢神経)、刺激をとらえて反応した結果の動く(反射、随意運動、骨格・骨格筋・関節)を設定する 講義で人間のからだはどのようなつくり（形や構造、働き）になっているのかを理解する。そのためには自己学習が必要不可欠である。得た知識を使える知識に（生活行動からからだの働きを理解する）なるように努めて欲しい。				
回	学習項目	学習内容			授業方法
1	情報の読み取り→記憶 →判断→指令①	神経伝達のメカニズム(神経細胞) 中枢神経と末梢神経の構造			講義
2	情報の読み取り→記憶 →判断→指令②	大脳 間脳 脳幹			講義
3	情報の読み取り→記憶 →判断→指令③	小脳 脊髄(下行伝導路)			講義

4	情報を得る受容器①	感覚の伝導路(上行伝導路) 見る	講義
5	情報を得る受容器②	聞く 味を感じる・におう	講義
6	情報を得る受容器③	触れる 痛み	講義
7	情報を伝える	脳神経 脊髄神経 自律神経	講義
8	脳の高次機能	睡眠 記憶 本能・情動行動	講義
9	動くための土台①	全身を形作る骨格 骨の構造とはたらき 骨の組織 骨の成長と老化	講義
10	動くための土台②	関節の構造とはたらき 骨格筋の構造とはたらき 筋収縮のしくみ	講義
11	臓器を守り、身体を支える骨格筋	臓器を守り、身体を支える骨格筋	講義
12	腕と手を動かす	腕と手を動かす骨格筋	講義
13	立つ・歩く	全身を支えて立つ・歩く骨格筋	講義
14	情報伝達	人はボールが目の前に飛んできた場合どのように行動する？	演習
15	動く	人はボールが目の前に飛んできた場合どのように行動する？	演習